九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フランス地理学とアナール学派

野澤，秀樹

https://doi.org/10.15017/2230685

出版情報：史淵. 122, pp.203-232, 1985-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

フランス地理学とアナール学派

野澤秀樹

はじめに

今日、世界の歴史学界におけるフランス・アナール学派の華々しい活躍については贅言を要せぬところであろう。それに伴いアナール学派に関して様々な角度から史学史的なアプローチが試みられている。[1] これらの諸論考の多くはいずれもアナール学派を成立せしめた基盤の一つとして、P・ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ（以下ヴィダルと略記）を始祖とするフランス地理学派に論及している。しかしいずれもそのことに簡単に触れるだけであって、フランス地理学派のいかなる点が『アナール』を生む根拠の一つとなったのか、また両者の関係がどのようなものであったのか、深く立入って論及するまでには至っていない。最近地理学の側では、イギリスの歴史地理学者A・ベーカーがこの問題について端緒を開いたが、[2] なお充分な論究を得ておらず、さらに学史的な追究が必要なように思われる。

筆者はフランス地理学史をそれぞれの時代のコンテクストの中で把えることを試みているが、そのコンテクストの一つとして、隣接諸科学との関係は重要なテーマとなろう。本稿で試みようとする問題はその一環をなすものである。

一　アナール学派と地理学

(1)　アナール学派について

上述のように近年アナール学派についての論考が非常に多いのは、いうまでもなく近年のアナール学派の活躍に刺激されてのことであるが、ここで筆者が取り上げてみたいと考えているアナール学派とは、今日その名を轟かせているアナール学派ではなく、実はそのアナール学派を築いた『アナール』の創刊者マルク・ブロックとリュシャン・フェーブルと地理学との関係がその中心テーマである。いわゆるアナール学派とは『アナール』誌に集まった人々を漠然と呼んでおり、特に近年の活躍を指して使われるようである。戦前の、しかも創刊者についてアナール学派と呼ぶのは適わしくないかも知れないが、一応便宜上そのように呼んでおきたい。この時期の重要性については、戦後『アナール』誌を率いることになるF・ブローデルの証言が参考となる。ブローデルの下でアナール学派を研究したT・ストィアノヴィッチはアナール学派の方法を一つのパラダイムとして把え、その形成期を戦後とくに一九六八年以降においている。[3] しかしこの書に序文を寄せたブローデルはその中で、ストイアノヴィッチの説に反対し、『アナール』のパラダイムの形成にとって、決定的な時期は一九二九―四〇年の間にあるとしている。[4]

またフランス歴史学の流れを概観したP・ショーニュはその著書の中で、三〇年代にフランス歴史学に大きな転換があることを述べている。[5] それは第一にデュルケーム派の経済社会学者F・シミアンによって始められ、経済史家E・ラブルースに至る賃金、物価などの長期間に渡る変動史の研究で、今日の時系列史、数量的な歴史学への端緒が切り拓かれたこと、第二に、後にブローデルによって確立される地歴史学（ジオイストワール）の萌芽がみられたことの二点にこの時期の重要性をおいている。ここではこの第二点の視点形成における地理学との関係が問題とされる。

ところでブロック、フェーブルによって創刊された『アナール』はよくいわれているように従来の伝統的歴史学―

事件史（政治史・外交史）の重視、史料（テキスト）の絶対的重視―に対する批判、歴史学内部におけるだけでなく、諸学問間の分化傾向への批判として興ったとされている。こうした批判に対して、知的な武器―すなわち『アナール』の成立基盤―となり得たものが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、フランスの人文諸科学の間で発展しつつあった。(1)E・デュルケームに率いられた『社会学年報』（一八九八年創刊）に集まった社会学派。(2)『歴史総合評論』（一九〇〇年創刊）によるH・ベールの歴史学改革運動、そして(3)ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュに率いられた人文地理学派（『地理学年報』一八九一年創刊）がそれである。

ここではこのうち第三のグループ、地理学派と『アナール』との関係が問題にされるが、この三つのグループはアナール学派との関係においてのみ結びつくのではなく、すべて相互に関連しあっており、今世紀初頭のフランス人文科学の発達をみる場合、この三つのグループおよびアナール派を含めて相互に関係づけてみることが必要である。(1)と『アナール』、(2)と『アナール』の関係についてもすでにすぐれた論考をえている。[注] 筆者も(1)と(3)の関係について論じたことがあるが、[注] (2)と(3)についても別に検討を加えている。

さてわれわれがこれから問題にしようとする時期は、先きのブローデルのアナール派形成の「決定的時期」、またショーニュのいうフランス歴史学の「転換期」にあたる。今日のアナール学派の活躍からみるとあまりに古く、問題にもなりえないような時期であるが、ブローデル、ショーニュのいうように今日のアナール学派形成の基礎を考えるとき、重要な意味をもつ時期のように思われる。また後にみるように地理学とアナール学派に代表される歴史学との関係がもっとも友好かつ有益な関係にあった時期である。[注] それと対照的に、後に簡単にふれる予定であるが、戦後の地理学とアナール学派との関係をみるとき、後者の著しい活躍とは対照的に、沈滞した地理学のあり方に反省を迫るものがある。

(2) L・フェーブルとM・ブロック—地理学との関わりにおいて

L・フェーブルが地理学ときわめて深い関係にあることはよく知られており、地理学者の中にはフェーブルを地理学者と思違いをしているものがいるほどである。

フェーブルは高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）時代からヴィダルの地理学に親んだといわれる。[9] フェーブルを研究したH・D・マンはフェーブルを造り上げた二人師の一人として、ヴィダルを上げているほどである。[10] 確かにわれわれはフェーブルの書いた著書・論文をみる限り、彼がヴィダルを深く敬愛し、その地理学を信奉していたことを知ることができる。しかし何故フェーブルはそれほどまで、彼の専門外である地理学や地理学者に心酔したのであろうか。多くの理由が考えられようが次の二つの点をとくに指摘することができる。[11]

一つはヴィダルの中に一九世紀最大の歴史家といわれるジュール・ミシュレの影をみたのではなかろうか。フェーブルは歴史家ミシュレを尊敬して止まなかったといわれるが、ミシュレの土地に根差した歴史、「地理なくして歴史なし」という主張を、ヴィダルの、その裏返しである歴史なくして地理なしという、深く歴史を刻みつけた土地からみてゆくヴィダル地理学の中にミシュレの姿をみたとしても不思議はない。

二つにはヴィダルの地理学の方法である地域研究を高く評価していること。ヴィダル派の地域研究の中に、のちに『アナール』において主張されてゆくことになる全体史の構想をみたこと。すなわち個々の現象をばらばらにみるのではなく、全ての事象を連関の中でみること。これはヴィダル地理学の根本理念である〝地的統一〟の原理であり、ヴィダルはそれを地域研究において具体的に押し進めたのであった。このような理念の中から、ヴィダル地理学に重要な概念である「環境」、「社会集団」、「生活様式」、「文明」などの概念が生み出され、それがフェーブルにも吸収されてゆく。このようにしてヴィダル地理学に共感をもったフェーブルは地理学者の業績を克明に追ってゆく。

『アナール』が創刊されるまでは、フェーブルははやくからその編集にたずさわっていたベールの『歴史総合評論』

誌上に詳しい書評を発表してゆく。[12] フェーブルにとってそれは益々彼の地理学に対する素養を向上させていっただけでなく、歴史学にとって地理学の役割を認識させることになったであろう。また地理学にとっても大いに反省と励みの機会となった筈である。この『歴史総合評論』誌に発表された一連の地理学の成果に対する検討が、後にベールの主宰する『人類の進化』叢書の一巻として世に出た『大地と人類の進化』となって結晶した。[13] この書はデュルケーム派社会学から人文地理学に向けらるた批判に対し、ヴィダリアン地理学擁護の論陣を張ったものであり、地理学と歴史学との協働関係を表明した、地理学の方法論の書として知られている。[14] 本書に対する地理学界の評価は、今日必ずしもプラスのものばかりではなく、その本の出現以後地理学はそれに安住してしまい、方法論的論議とくに隣接科学との接触を失わせてしまい、地理学の発達を遅らせてしまったという。[15] これはむろんフェーブルの責任ではない。またヴィダルの地理学に『可能論』のレッテルを貼ってしまい、彼の地理学を狭く理解させることになってしまったというものである。これもその責を一方的にフェーブルに負わせることはできない。[16]

その後もフェーブルは地理学に対する関心を失わず、一九三五年には地理学者A・ドマンジョンとの共著でライン河の経済史的問題を扱っている。[17] 一生涯、地理学への共感を失わず、地理学者との交流に努めた人であった。[18]

もう一人の『アナール』の創刊者M・ブロックについて簡単にみておこう。彼もフェーブル同様はやくから『歴史総合評論』に寄稿している。彼がいつ頃からどのようにして地理学に関心をもち始めたのかは定かではないが、一九二六年に短いノートを『地理学年報』に寄せている。[19] ブロックが地理学の成果に対してその書評を発表し始めるのは、主に『アナール』発刊後の同誌上においてである。[20] とりわけ農村研究に注意を払っているのが注目されるところであり、地域研究（モノグラフィー）の成果が彼の主著の一つに上げられる『フランス農村史の基本性格』の成立に、多くの資料を提供したことはよく知られているところである。彼の地理学に対する素養は大変なものであり、かってストラスブール時代の

同僚であった地理学者H・ボーリックは〝地理学者ブロック〟と讃えているほどである。[21]

次にわれわれは地理学とアナール学派との関係をブロックを中心に、フランス農村研究を通してみてみたいと思う。

二　フランス農村景観研究―M・ブロックの『フランス農村史の基本性格』をめぐって―

(1)　フランス地理学と農村研究

地理学の基本理念を「地的統一」――地表上における諸現象は互に関連し合い、特殊な事例を規定するところの普遍的法則に従っているような一つの全体であると解する観念[22]――におくヴィダル・ド・ラ・グラーシュの地理学にとって、フランス農村は永い歴史の中で、人間と自然との協同作業の労作であり、地表上に刻みつけられた地的統一理念の具現された姿とみることができる。かくして古い歴史的伝統をもつフランス農村は地理学の恰好の研究対象とされ、ヴィダルはそれを個別的地域研究として行うことを弟子達に唱導したのである。このようにして学位論文となる「地域研究（モノグラフィー）」が数多く積み重ねられていった。地域研究の中心テーマであった農村集落研究はヴィダルの高弟に当り、ヴィダル亡き後フランス人文地理学を担うアルベール・ドマンジョンに至って大きく前進する。ドマンジョンを中心としたフランス学派の集落研究はわが国でも戦前から詳しい紹介がはされており、[23]戦後も谷岡武雄によるまとめがある。[24]

ドマンジョンはまずヴィダル以来の集落の集中・分散という形態研究から、フランス国内のみならず世界的な分布に注目し、その形成原因への追求に進んでいく。地形・地質、水利などの自然条件からの説明における限界を認め、社会的諸条件、農業経済の影響を重視する。とりわけ後者における集落様式への土地制度（レジーム・アグレール）の影響にはやくから注意し

たところである。[25] このように集落の立地・形成・形態・構造が農地構造と関係づけられながら研究されたのである。そしてその場合現在の説明として歴史に遡って研究する方法がとられたのである。

この農村集落の諸問題は国際的にも共通の課題となり、ドマンジョンが中心となって国際地理学会の中に農村集落の委員会が組織され、二〇年代末にかけて何度か農村集落研究の国際会議がもたれている。[26]

以上のようなフランスにおける農村集落を中心にした地域研究や国際的な成果を踏まえ、自からの史料研究に加え、さらに考古学・言語学などの成果を吸収し、フランス全体の農村史の総合化を行ったのが、『アナール』創刊者の一人M・ブロックである。[27]

(2) M・ブロック『フランス農村史の基本性格』

M・ブロックの『フランス農村史の基本性格』(以下『基本性格』と略記)は周知のように農村景観だけをテーマとしたものではなく、領主制、土地所有、社会集団などが農村景観との関わりの中で論じられているが、ここではのち本書をめぐって地理学との間に協同関係が展開され、地理学の領域と密接に関係する農村景観の問題についてのみ簡単に要約しておこう。

ブロックは『基本性格』において、地理学では農村景観概念に含まれる土地制度(レジーム アグレール)という概念について、「技術的な手段と社会機構の原理との複雑な綱の目」と定義し、[28] この土地制度が地域類型を示すとき、彼はそれを「農地文明(シヴィリザション アグレール)」と呼んでいる。永い歴史の中で地表に刻みつけてきた人間的営為を「文明」と呼ぶヴィダルの文明概念をここにみる思いがする。

彼は周知のようにこの「農地文明」を三つの類型に分けている。[29] 第一は、瘠せた土地と弱い占有の型を示す囲い込み耕地制度の地域で、ここでは個人主義的精神が卓越している。他の二つは、緊密な占有の型を示し、いずれも開放

耕地の制度をもつ地域で、ここでは耕作と家畜飼育との均衡を特徴とし、それを維持するための共同体的規制を原則としており、それの程度の違いおよび耕地形態の違いから次のように分けられた。そのうちの一つは「北方型」と称されるもので、ここでは三圃制に象徴されるように強固な共同体規制と長地型紐状耕地をもつ、そしてその耕地形態は有輪犁（シャリュ）によるものとされた。第三のタイプは「南方型」と称されるもので、このタイプは「北方型」に比べ共同体的精神は弱く、輪作形態は二圃制を特色とし、耕地形態は開放されているが、北方のような紐状の規則的な耕地の配列ではなく、不規則な耕地形態をしている。その耕地形態は、古い型の軽い無輪犁（アレール）によるものとされた。

以上のような類型づけにあたって、上の土地制度の定義にみたように、農業技術、とくに犁によって社会組織、耕地形態が規定されるとしている点に注意しておこう。ブロックは以上のような地域的対照がフランスの歴史的発展一般に対して深い影響を与えたのだろうと考えるのである。

ブロックの『基本性格』に対する地理学者側からの反応はどうであったろうか。ドマンジョンそしてジュール・シオンは敬意に満ちた書評をそれぞれ『地理学年報』と『歴史総合評論』誌に載せている。[30] シオンは地域的差違、自然環境との諸関係を明らかにしているブロックは地理学者であると評している。

さて、二人が共通にブロックの著書に対して提示した問題点は、土地制度として耕地形態、技術、社会組織の関連については詳しく述べているが、それと集落（形態）との関係について、あまりふれていないのを遺憾としている点である。土地制度と集落形態は互に深く関係し、これはドイツ集落地理学において先鞭（べん）をつけられ、[31] フランスにおいては上述のドマンジョンが研究をすすめた問題である。

またブロックの著書における「南方型」の土地制度に対する問題について、モンペリエのシオンは自己のフィールド調査から南部の不規則開放耕地の問題にコメントする。ブロックの主張するような共同体規制の弛緩は、地中海地

方の特徴である「地形による耕地の極端な細分、表層地質の多様性」に、また地中海地方の土地の多くの部分が手を使って耕作されるということが南部の土地制度の起源の中にある事実として考慮すべきであるという。[32] このように南部における諸地域との対応を考えるとき、ブロックの「南方型」の類型規準とされたものが、必ずしもうまく適用しない点をシオンは指摘するが、これは南部に限らず、三地域類型内における多様性(バリエティ)が、ブロックの著書以後、フランス各地に見い出されていくことになる。

細部にわたる点は別として、地理学界に大変な好意をもって迎えられ、高い評価をうけたブロックの『基本性格』は「一連の一般的仮説を提示するとともに、歴史学のみならず、地理学の新しい研究の方向づけを行なったのである。[33]」地理学に対するその影響はロジェ・ディオンの中に代表的にみることができる。われわれはここで直ちにディオンの成果に立入る前にブロックの著書に続いて著わされたもう一人のフランス農村史の研究にふれておこう。

(3) ガストン・ループネルの『フランス農村史』

それはディジョンの歴史家G・ループネルの『フランス農村史』である。[34] この書は上掲のブロックの著書と次にとり上げるディオンのそれのちょうど中間に著された。ループネルの書にブロックの『基本性格』の引用をみることができるが、ブロックとは全く独立に進められた研究であろう。ループネルは『アナール』とは直接関係がなかったようであるが、一九七四年版にはE・ル・ロア・ラデュリー、P・ショーニュらの今日のアナール学派を代表する人々が解題を寄せているのは、彼の農村史が『アナール』的なものがあることを示す証左であろう。ある面からいえば、ブロックのそれ以上に地理学的なところがある。ループネルの人間と土地、人間活動と場所との間にある関係から農村をみる見方、人間を土地の子とみるその考え方はヴィダリアンの地理学そのものである。森林・畑・道路・村落などの農村景観構成要素—それらはそれぞれ個々別々のものとしてではなく、互に競合し、結合し一つの統一体をつく

るーの分析から、社会制度や農民魂へと進む方法は、ヴィダルが地理学を土地から人間へ至る科学として特徴ずけたまさにその方法に対応する。ショーニュもループネルの方法に、今世紀初頭伝統的歴史学批判の有力な方法の一つとしてヴィダルの地理学を取上げたフェーブルやブロックと同じものをループネルにもみとめているようである。ループネルもブロックと同じように当時の地理学の成果を吸収している。その方法と叙述はわれわれを引きつけて止まないが、ドマンジョンが史料によらず想像によっているところが多いと評しているように内容的にはいくつかの問題を懐んでいよう。三圃式、共同体規制を伴なう開放耕地農村を中央ヨーロッパからの古い起源（紀元前六、〇〇〇年）に求めていること、フランス農村の特徴を、北・東フランスにのみ特徴的な、農村文明の一類型にすぎない開放耕地農村に求めていること、従って西部のボカージュ、南部の農村文明地域は軽く取り扱われるにすぎないことなどがそれである。さらに南部の農業を共同体規制をもつ開放耕地農業の不完全な侵透にすぎないとみていること。また地理学者がその特異性を読みとる西部のボヤージュの農業制度をアルカイックなものと考え、特定のオリジナルな土地制度というよりは遅れた時代の制度にすぎないという。以上のようにフランス農村文明の一類型にすぎない開放耕地農村を絶対視し、他の南部や西部の農村文明を北のそれの征服あるいは遅れた文明の残存とする見解には問題があるが、フランス農村を特徴づける共同体的村落の構造を、永き歴史の中で、土地との強力な関係において形成された農民魂の中にみごとに描いている。

以上のような内容をもつループネルの『フランス農村史』はヴィダル精神の横溢した地歴史学的な研究であったが、歴史学のみならず地理学においても、先きのブロックほど広く影響を及ぼしたようには見えない。その後のフランス農村景観研究はブロックそして次にとりあげるディオンの研究をめぐって展開していったといっても過言ではない。

(4) R・ディオンのフランス農村景観研究

ブロックの『基本性格』の地理学における影響はR・ディオンの業績を生み出す。

ディオンの学位請求論文となる地域研究（モノグラフィー）のフィールドは、ブロックが『基本性格』の中で、農地景観のコントラストの場所として注目したロアール河の谷であった。[36] このディオンの大作はヴィダルの直弟子にあたるドマンジョンやションらによる初期の地域研究（モノグラフィー）の後を継ぐ、いわばヴィダリアン地理学第二世代の地域研究中の傑作の一つに数えられるもので、歴史家フェーブルやブロックに高く評価されたものである。[37]

ブロックは、地理的構成から北フランスのボースやピカルディー地方と同一の農地景観をもつことを予想したベリーとポアトー地方が、《開放・紐状耕地の土地制度》と異なって、《開放・不規則耕地の土地制度》をもつことに注目し、このコントラストが技術（犂）の差異より起ったとする自説を補強する。[38] しかしディオンによれば、不規則耕地の地方とされる南部ガティネ・ソローニュ・ベリー地方は農業革命以前には、北フランスの犂とは異なるが、かつては有輪犂を使用していたことが明らかで、開放・不規則耕地の土地制度によって開放・紐状耕地に固有な技術が採用されるところをみると、犂の型はブロックが土地制度の組み合せの中で指摘しているような本質的な対立ではないという。[39] またロアールの谷は一八世紀には、囲い込み不規則耕地と開放・紐状耕地が共にみられる景観をなしているが、かつては前者が支配的であったことなどを明らかにしている。[40]

ディオンはこのようにロアールの谷の地域研究（モノグラフィー）で開放耕地制度と囲い込み耕地制度の対立の外、それに対応する集村と散村、家屋型や農業経営などの二類型の農村景観の対照の形成や変化を詳細にあとづけた。このような二つの対照的な景観をもつ地域研究（モノグラフィー）から出発し、次いでフランス全体を視野に入れた農村景観形成の総合化を試みた。[41]『フランス農村景観形成試論』（以下『試論』と略記）と題されたこの著書は、ブロックの名著の蔭にかくれてしまった感があるが、ブロックのそれとともに三〇年代前半に現われたフランス農村景観に関する二大名著である。

ディオンはこの書において、革命直前のフランス各地を旅行しその旅行記を残したイギリスの農学者アーサー・ヤングによりながら、そして彼のフィールドであるパリ盆地の景観がオルレアンの森を境に南北に明確に分けられることからブロックとは異なって、フランス全体を二類型の農村経済に大きく分けている。そしてそのコントラストを説明するものとして、自然条件から始まり歴史的・社会的諸条件を検討し、それぞれの有効性と限界を識別しながら、ブロックのように技術に求めるのではなく、伝統的な社会的事実としての「共同作業」の有無に注目している。[42] そうすることによって北部農村の農業経営は共同作業として理解することができ、それに対して南部の農村の経営の特色は各耕作者の独立と自由にあるとする。このように農業経営における共同作業や南北土地所有構造の違いを規準にディオンは二つの農村経済の特色を次のように要約することができた。

(1) 本質的に共同体慣行の上に築かれた北部の農村経済は、三圃制、混在耕地制、牧畜に従属した農業を特色とする。なおディオンによると紐状耕地は、ここに特有なものではないとされる。

(2) 南部の農業は囲い込むこと、木を植えることの自由さがあり、二圃制と、さらに北部では土地が耕作と牧畜と区別されないのに対し、南部では耕作用の土地と家畜の土地とが区別されていることを特徴とする。従って共同放牧の規制がなく、私的土地所有に結びつく。

共同作業あるいは共同体規制が歴史的に牧畜を基盤とした農耕の発達に由来すると考えるディオンは本質的に牧畜と結びつく森林の存在形態にも注目する。南部の森林では、家畜の放牧による荒廃が進んでおり、南に行けば行くほど荒廃の程度が進み、露わな岩肌をみせる地中海景観へと至るのに対し、北部では大きな森が、一本の木も見られない耕地と併存していること、南部では森林の破壊されてゆく一方、農地へ木々が分散している等、上の農業経営の相違が森林景観の相違を生み出しているとする。

ディオンは以上のように図式的にフランスを地域類型化するだけでなく、この二つの地域類型の中に、地域の多様

性を追究し、豊富な事例を上げて、この二つのコントラストにニュアンスをつけている。たとえば北部では北西部における北部のシステムの中での囲い込み耕地の存在（そこでは共同体慣行の衰退がみられる）、また南部では北部よりバラエティーに富むが、そのうちで囲い込み耕地の中の開放耕地である《カンパーニュ》の存在について詳しく紹介、その景観の特徴を述べている（ここでは開放耕地・混在耕地制・共同放牧・集村がみられる。ただ混在耕地制については、北部とは異なり、自由であり耕区への区分がない）。さらに南部におけるぶどう栽培に代表される樹木栽培が南部農業村景観と密接な関係にあることに注目する。それはともあれ、こうしたその地域的バラエティーの事例は、上の二つの農業文明（シヴィリザシオン・アグリコール）の存在を傷つけるものではないという。

さらにこのような農村景観が形成されてきた、歴史的過程にも古文献・史料・地籍図を駆使して研究しているが、フランス農村景観におけるローマ的伝統を重視している点が注意される。

ディオンの『試論』に対してはかなり厳しい批評が、まず地理学者から寄せられた。ドラマンジョン、シオンはディオンの著書はいくつかの新しい知見、著者の才知を示してはいるが、なお本書のような総合化、一般化は早急にすぎたとし、多くの問題点を指摘している。[43] これをいちいち紹介することはできないが、上のブロックの著書と関連して類型の問題についてだけふれておこう。

ディオンは南北に二分する根拠として、農業経営における共同作業、共同体規制の有無・強弱をもってしているが、そのことによって南部に囲い込み耕地の地域と、いわゆる南部の不規則開放耕地が一緒に繰り入れられる結果となっている。それはディオンによると南部が共同体規制が弱いこと、また実際にそれを行使するか否かは別として、囲い込む自由をもっていたことを以って、北と分ける根拠としているものである。しかしシオンは囲い込み耕地が明確な景観的・社会的な意味をもつものであるから、ブロックのように南部地域は囲い込み耕地の地域と開放耕地の地域に分けた方がよいとする。[44]

他方歴史学の方ではブロックがディオンの『試論』に対して、好意的な書評を寄せながらも、彼との相違点を明確にしている。[45]

まずディオンのシェーマが森林に注目していることを評価しつつも、南部囲い込み地域の森林の荒廃が共同体規制の弱さにあるとするディオンの意見に対して、南部の囲い込み地域にも《社会的な原理（ディシプリン）》はあるのであり、森林開発の歴史は農地の慣行あるいは集団精神の二つの類型の間の単純なアンチテーゼとして捉えるにはあまりに複雑であると警告している。また農村景観地域類型についても、上述のようにディオンはロアール河の南を囲い込み地域として一括するわけであるが、ブロックは囲い込み（クロチュール）の問題は耕地に囲いがあるかないかが問題であり、ディオンのいうような農地に木が植えられていたり、耕区の境界に植えてあったり、あるいは道に沿って植えられていたりするのはあまり問題にならないとする。すなわち南部にも北部と同じように囲垣を欠いた耕地があり、それは集団規則によって禁止されていたのであるとし、ディオンが南部において共同体規制を弱くみていることを批判している。さらにディオンが南部を一つの農村経済の類型としてまとめている根拠に、不規則開放耕地と囲い込み耕地の間に類以性があり、南部ではそれが二圃制として共通にみられることを上げているのに対し、ブロックは二圃制の境界は耕地の形態のそれとほとんど一致しないことを指摘している。ここでブロックの方がむしろ地理学者の感を呈している。

(5) ブロックとディオンの影響

ブロック、ディオンのフランス全体の農村景観を総合化した試みに対して、再びそれが個別地域にはね返り、多くの成果を得ることになる。[46] 三〇年代以降のフランス地理学は、この両者を軸に農村景観研究に活況を呈した。このような中で南部・地中海農村景観についてシオン、ダニエル・フォーシェの研究を上げることができよう。

シオンは、ディオンの地中海農村の見解に対して、自からのフィールドで逐一それを検討している。[47] シオンは地中

海農村を一つの独自な農地文明地域と考えていたようだが、早く逝ってしまった彼には、そのことを想像させる草稿の断片が残されているだけである。[48] それらによれば地中海地域の占拠様式はまず地中海平野の地形的特徴にあること、すなわち地形がモザイク状をなしていること、このことが農地の極端な細分化や不規則性をもたらしていること。それに表層地質の多様性もプラスする。さらに地中海地域の人間占拠が水の得られる丘陵斜面から上方へは牧畜、下方へは樹木・畑作へと垂直方向に拓けて行ったこと、その結果地中海農業の特徴は結局樹木栽培と牧畜にあり、そして南北農村の相違として、南部農村が二圃制に適した小家畜（羊・山羊）にあること、並びに耕地片があらゆる可能な形態に従って重り合っていること、小経営と大経営の併存と耕地の配置関係の特徴を指摘している。

トゥールーズの地理学者フォーシェはブロックによって南部・地中海農村の特徴とされた不規則耕地・二圃制について、とりわけ後者について地中海地方の気候特性にあることを指摘する。すなわち夏の乾燥によって春播きの耕作が不可能なことを強く主張、また南部農村景観の特色として多角経営（ポリキュリチュール）を指摘しているのも注目しておいてよかろう。[49]

ブロック、ディオンに刺激されたフランス農村景観の研究はシオン、フォーシェの南部・地中海農村景観の研究に限らない。開放耕地農村の典型的な例とされる東部フランス・ロレーヌ地方の農村景観を研究したジュール・ブラーシュ、複雑な景観をみせる南部アキテーヌ盆地、ペリゴール地方をフィールドとしたポール・フェヌロンなどの研究が三〇年代現われた。[50]

ブロック、ディオンに刺激されたこのような個別地域研究は、再びブロック、ディオンにリアクションし、両者も修正・補正を余儀なくされる。

ブロックは農地文明の三類型の根拠とした耕地形態の違いの成因を農業技術―犂に求めていたことは上で述べたが、この考え方については地理学者テオドール・ルフェーブルのピレネー地方や先きのディオンのロアールの谷の

地域研究（モノグラフィー）をみるに及び、それを破棄するに至る。[51] 一九三一年の『基本性格』の出版以降、ブロックは各地で行われた農村景観研究の成果に気を配り、豊富な知識を吸収する。この豊かな資料を用いて、彼自身の手によって『基本性格』は書き直されることはなかっが、一九六一年ロベール・ドゥヴェルニュによって、ブロックの論文を使い前書と同じ構成をもった『基本性格』の第二巻が編集され、先きの書が一層豊富な資料で補充されることになった。[52]

他方、ディオンもブロック、ドマンジョンらの批判を受けつつ、またとくにシオンからの地中海農村景観についての見解は、この地方に対するディオンの認識不足を補って余りあるものであった。[53] そして彼の二大分類から、西部、南部の農村景観の独自性を取り入れるに至っている。[54] ディオンもブロック同様、前者を新たに書き直すことはなかったが、戦後パリ盆地を扱った長文の論文は、農村景観に対する自然環境の微妙な違いを指摘する一方、その説明のためには歴史に依存することの必要性を重視し、経済・社会環境（アンビアンス）の変化を三大期に分け、それぞれの農村景観の形成をあとづけた。[55]

われわれはこのようにフランス農村景観研究において地理学と歴史学の美わしい協働関係をみるのである。

三　農村景観研究とアナール・パラダイム、および戦後のアナール学派と地理学

(1)　農村景観研究とアナール・パラダイム

われわれはこれまでにおいて『アナール』の創刊者フェーブル、ブロックと地理学の関係について、とくにブロックの土地制度、農村景観研究をめぐってみてきた。この研究分野がブロックを中心とした『アナール』と地理学との関係がもっともよくみられ、かつ成果のあった分野であったと考えられる。筆者はそれを上で歴史学と地理学の美わしい協働関係と表現した。しかし「美わしい協働関係」とは本質的にはどのようなものだったのだろうか。また何故

この分野において『アナール』と地理学との協働関係がみられたのであろうか。さらにここにフェーブル、ブロックが掲げた『アナール』のパラダイムをみることができるのであろうか。この問題に答えることが本稿の目的である。

一九三〇年代以降のフランス農村景観研究の起爆剤の役割を果すことになるブロックの『基本性格』が生み出されるには、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュに率いられたフランス地理学派によって蓄えられた地域研究（モノグラフィー）の成果が大きな役割を果したことは上述した。ブロックの同書の冒頭に付された文献案内に地理学者の地域研究（モノグラフィー）が多数取上げられていることに、ドマンジョンは地理学のために素直に喜びを表わしている。[56] 各地の地域的特殊研究に全勢力を注いでいた地理学にとって、総合化の試みには、ブロックという稀代の才能を必要としたともいえる。そしてブロックの存在が地理学にとって大きなプラスとなったのは、地理学者ディオンを育てる契機を与えたことであろう。ディオンがロアールの谷の地域研究（モノグラフィー）や『試論』をまとめるにあたって、ブロックの『基本性格』がどんなに大きな刺激を与えたかを、彼自身語っている。[57]

ブロックの『基本性格』は一つの総合の試みであるとともに問題提起の書でもあった。たとえば南部の二圃制や北部におけるそれの残存の問題、ブルターニュを始め囲い込み耕地の中の《カンパーニュ》の問題、さらに南北農地文明のコントラストの問題など、のちD・フォーシェ、エティエンヌ・ジュイヤール、アンドレ・メイニエ、マックス・デェルュオー、ルネ・ルボーらの地理学者によって研究された問題である。こうした個別地域の問題が再びブロックにはね返る。つまり個別研究（分析）と総合という協働関係がまず上げられよう。しかしより本質的な協働関係はもっと別の面にある。

ブロック、フェーブルは「生きな歴史学」を構築すべく『アナール』を創刊したのであったが、その基本的理念は「全ての事象を常に全体的な連関のうちに捉えること」（全体史）、「過去を常に現在との対話のうちに捉えること」（遡及的方法）の二つの視点にあったといわれる。[58] ところでこの二つの視点はすでにヴィダリアン地理学において獲得さ

れていた視点である。前者はヴィダルのいう「地的統一」の理念であり、後者はヴィダルの後ドマンジョンからディオンにおいて地理学の方法として確立されたものであった。[59] そしてこの二つの視点がもっともよく具体的に示されたのが、上でみてきた農村景観研究であった。

歴史学においても土地制度史、農村史研究においては言うまでもなく、土地・環境との関連において捉えることが不可欠のアプローチの方法であろう。農村の社会生活の基盤となる社会形態学的事実＝農村景観を地域的（ローカル）な土地を始めとする環境、歴史、技術、宗教、慣習など諸々の要因の複合体、統一体とみなす。それはヴィダル地理学の〝地的統一〟の地表上に具現された姿であり、それを農地文明として捉える点に地理学と歴史学の接点、さらにいえば従来の歴史学にない方法がヴィダリアン地理学にみたのであろう。しかし土地制度史、農村史の研究のみが土地・環境との関係を問われたのではない。『アナール』の人々にとって歴史とは土地・環境との関連において解き明かされるべきものであった。しかし歴史学はここに留まらない点に注意しなければならない。「全体史」とは土地から出発するにしてもそこに留まるのではない。それはブロックとディオンのフランス農村史の著書を比較してみることからも明らかになる。すなわちブロックの『基本性格』とディオンの『試論』の間に、内容的な事実関係は別として如何なる相違があるだろうか。ブロックの『基本性格』は第二章「農業生活」をみる限りは上述のような地理学的課題を解明しているとみてよいが、しかしそれが彼の最終目標ではない、むしろそれに至るための前提である。すなわち形態的事実である農地構造を通して、歴史学の課題である領主制、土地所有、社会集団等の社会史を構造的な全体史としえ把握することが目的である。

それに対してディオンの『試論』はフランス農村景観を特徴づける地域類型がどのように形成されてきたか、それを環境・歴史・技術・農業経営など様々な因子の連りの中に解明しようとする。またそうした連り＝結合の仕方、あり方によって農村景観の地域的バラエティーが生じてくることに関心があるように思われる。

この相違はブロック、ディオンの総合化の後、地理学においては地域的個別研究として地域的多様性を研究する方向に進んだこと、一方ブロックは再び総合化を企てる機会はなかったが、ドマンジョンのいうように彼は特殊性を常に一般化する方向に努力していたように思われる。[60]

今一つ『アナール』が地理学から受けた影響として、現在から過去に遡る方法が指摘される。[61] しかし現在から出発するとは次の二つのことを含んでいる。第一は地理学思想によるもので、回帰的方法とも呼ばれる。これは現在の説明のために歴史を遡ることで、すなわち、現在の状況の発生を再構成するために時間を遡ることを意味する。第二は歴史を理解するために、現実の問題、《現実の事実を認識すること》から出発することを意味する。従ってフェーブル、ブロックが歴史認識の正しい方法として求めたものはいうまでもなく、第二の意味において、現在から出発し歴史を遡る方法であった。従って現在の説明のために単に過去に遡るという地理学の方法について反省を迫るものである。地理学は現実の問題、それを認識することに欠けていたように思われるからである。

(2) 戦後のアナール学派と地理学

先きの歴史は土地・環境を始め全体との関連において解明さるべきだとする『アナール』の立場はのちフェルナン・ブローデルによって地歴史学（ジィオイストワール）と呼ばれるところのものとなる。地歴史学は、一般にある与えられた時の地理的状態の再構成を意味する「歴史地理学（ジオグラフィー・イストリーク）」に留まらず「真の全体史」を構成するところのものである。ブローデルは学位論文となる『地中海』の大作の第一部を「環境の役割」にあって、地中海および地中海地域の歴史的環境を詳細に明らかにし、第二部以降でフェリペ二世期の地中海世界の諸問題へと進んでぬく。「人間の諸活動の枠組としての空間組織についての考察を歴史学にとり入れた点……『地中海』は、地理学者ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュや歴史家フェーブルによる歴史学と地理学との架橋の試みを継承しつつ、両学問の相互浸透を提示するもの」とされる。[62]

ところで戦後も引き続き『地理学年報』のみならず『アナール』誌上に、毎号のように歴史学者に伍して地理学者によっる土地制度、農村景観関係の論文・書評が掲載され、戦前以上に相互の侵透を深めてきたのであるが、一九五七年のその問題に関する集中的掲載を最後に、地理学者によるこの関係の論文は姿を消すか、きわめてまれになる。これは農村研究に限らず、他の分野についてもいえることである。農村研究に関しては一九六一年歴史家ジョルジュ・デュービー、地理学者D・フォーシェ、E・ジュイヤールらの共同編集になる農村研究専門誌『農村研究（エチュード・ルーラル）』が発刊されたことによる面もあるであろうが、それ以上にアナール学派において地理学に対する関心の変化があったためと想像される。

ブロック亡き後、フェーブルを助け第二次大戦後の『アナール』を率いていくことになるF・ブローデルは、はやくからフェーブルに師事し、上記の大作を完成する。それは、フェーブル、ブロック以来のアナール学派の伝統となる歴史研究の基底に地理学をすえる方法をみごとに成し遂げた労作であった。それに明らかなようにブローデルの地理学に対する素養の深さは、師のフェーブル、さらにブロックと比べ、優るとも劣らないものであった。ところでいわばアナール派第二世代にあたるブローデルに至って、地理学とアナール学派との関係に変化の兆しがみえ始める。これまでのフランスの地理学は、地理学の良き理解者フェーブルの庇護の下、いわば無菌状態の安住した生活を送ってきたといえる。然るに第二世代に至って地理学は厳しい批判に立たされことになる。

戦後の地理学の危機を唱えたのは外でもない歴史家F・ブローデルであった。[63] 彼はいう。地理学は自からの殻にとじこもり、地理学の自律性を説くことは果して意味のあることかと。とくに地理学がその独自性の依り拠として、とり出してくるところの「地域」、あるいは「空間」は果して地理学に固有のものといいうるのかと。ブローデルにとっては「各科学は社会的（ソシアル）なるものの総体に対して開かれ、社会という家の全室・全階に通じる戸口である」、「各社会《科

学》が固有にもつのは観点と方法」である。確かに地理学にはその基盤として地図学、フィールド調査、景観への反省等観点、技術をもっている。地理学は特定の観点から全体的な社会的な問題の厚みを照射するものでなければならないという。[64] そのためには自律性を主張し、古い殻に閉じこもっていては何もなし遂げられない。社会諸科学の協働によって可能とされるのであって「全体から切り離された問題はあまり実り豊かなものとはならない」。[65] それはフェーブル以来、人文諸科学の協同を挙げた『アナール』の精神である。諸科学と協同するとは、いい換えれば他科学の成果を我がものに還元し、獲得することである。そのためには受け入れる側（ここでは地理学）の観点・方法が堅固としたものでなければならない。すなわち地理学の大綱あるいは座標軸が決められていなければならないだろう。そのためには「空間」、「地域」に還元することを依り拠にするだけでは不充分なのである。[66] かくしてブローデルは「地理学は社会の空間的研究すなわち空間による社会の研究である」とまで述べている。

以上のような戦中から戦後にかけて出されたブローデルの地理学批判に対して地理学者はどれだけそれに答えたことであろう。E・ジュイヤールは、地理学と歴史学をみごとに統合した観点を示し、かの大著をものにしたブローデルの主張―ここでは地理学と歴史学の結合―は期待できないとし、歴史学、地理学の役割分担を主張する。[67] 相変らず場所の科学としての地理学の主張、すなわち枠組（環境・空間）の歴史を解き明かす地理学とその枠組の中での歴史を研究する歴史学は全体史の中で遭遇するとする。しかしデュイヤールの主張は歴史家ロベール・マンドルーを納得させるものではなかった。[68] やがて地理学者が自からに課した仕事を歴史家自身が始めたのである。「社会的なもの」を取扱う社会諸科学が全体として共同に立ち向うべきこと――その場を提供しようとしたのが、ブローデルの率いる『アナール』であったろう――の提案に対して、地理学者はそれに少なくとも積極的に参加することができなかった。フェーブルの死後ブローデルが『アナール』を主宰する一九五七年以降、『アナール』誌への地理学者の投稿が、ほとんどみられなくなるのはその辺のところに理由があるように思われる。

この時期、フランス地理学界自体においてどのような変化があったか、これは稿を改めて別に論じられなければならないであろう。ただしあたって次のことはいえそうである。すなわち五〇年代から六〇年代にかけて、いくつかの分野を除きフランス地理学は、〈新しい地理学〉から取り残され、停滞をかこったことは否定できない。フランス地理学が眠りをむさぼっている間にアナール学派の人々は従来なら地理学の問題とされたであろう環境研究にすぐれた成果をあげ、[69] さらに空間的視点を取り入れた研究においてもめざましい発展をみせたのである。[70]

そうした中には地理学の代表的理論である「中心地論」的発想から歴史の空間構造のモデルを構築しようとする努力もみられる。[71] 地理学が開発した空間理論が、歴史学にも寄与しうるように思われ、再び新た協働関係の時期が到来している。

おわりに

地理学と歴史学の関係はフランスの場合、地理学の発生からみてきわめて密接な関係にある。歴史学から独立し、一つの独立科学としてオリジナルな方法を確立したヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学は旧態依然たる伝統的歴史学に対する批判として興ったフェーブル、ブロックの『アナール』に「新しい歴史学」成立のための根拠を与えた。ヴィダル地理学の方法は事象を全体の関連の中で捉えるという、いわゆる〝地的統一〟の観念として表わされるものである。また現在から歴史へ遡るヴィダル派の方法も、現実の問題状況を認識することが、歴史を理解する正しい方法であるというアナール学派の歴史認識を確立する上にも少なからず寄与するところがあった。こうした方法が具体的に最もよく適用されたのがフランス地理学派の地域研究（モノグラフィー）であり、テーマとしては農村景観研究であった。そしてこの分野において歴史学との協働関係がみられたのである。しかるにその後地理学は古い殻に閉じこもり、地域研究に

埋没してしまっているうちにアナール学派はその創刊時の理念を一層深化させ、〈新しい歴史学〉の確立に向け、今日社会諸科学の中心として著しい進歩をみせている。われわれは新たな協働関係を模索しなければならない。

〔注〕

(1) P. CHAUNU: *Histoire, Science sociale. La duree, l'espace et l'homme à l'epoque moderne, S.E.D.E.S. 1974, 440 p.*; T. STOIANOVICH: *French Historical Method: The Annales Paradigm, Cornell,* 1976, 260p.; R. FORSTER: Achievements of the *Annales* School, *Journal of Economic History,* **38**, 1978, p. 58-76.; A. BURGUIÈRE: Histoire d'une histoire: La naissance des *Annales, AESC,* **34**, 1979 p. 1347-1359.; J. REVEL: Histoire et sciences sociales: Les paradigmes des *Annales, AESC,* **34**, p. 1360-1376.; 岸田達也『ドイツ史学思想史研究』(〝ネルヴァ書房〟、一九七六、二六六—二九二頁。二宮宏之「歴史的思考とその位相—実証主義歴史学より全体性の歴史学へ」、『フランス文学講座』(大修館) **5**、一九七七、四二五—四四四頁。高橋清徳 M・ブロック『比較史の方法』(創文社) 解説、一九七七、六七—一一八頁。井上幸治「アナル派の成立基盤」『歴史評論』**三五四**、一九七九、二—一五頁。山瀬善一・中村美幸「フランス〈アナール〉学派の方法」『講座西洋経済史』(同文館) V、一九七九、九八—一二八頁。服部春彦「フランス歴史学の転換」河野健二編『ヨーロッパ一九三〇年代』(岩波書店) 一九八〇、三四二—三六五頁。杉山光信「『社会学年報』から『経済社会史年報』へ—一九二〇年代のマルク・ブロックとリュシァン・フェーブル」『思想』**六八八** 一九八一、一五一—一六四頁。樺山紘一 E. ル・ロア・ラデュリー『新しい歴史学』(新評論) 解説、一九八〇、三〇九—三一七頁。本池立「『アナール』への道—フランス伝統的歴史学批判」『思想』**七〇二**、一九八二、一四—三〇頁。

(2) A.R.H. BAKER: On the Relations of Historical Geography and the *Annales* School of History, 『歴史地理学ブロシーディング』(古今書院) 1982, p. 318-322.

(3) T. STOIANOVICH. o.p. cit. p. 20.

(4) Ibid. p. 10.

(5) P. CHAUNU, op. cit. p. 62. 服部春彦の前掲論文はその批判。

(6) (1)とアナール派に関しては、杉山光信の前掲論文。(2)とアナール派については、井上幸治の前掲論文がそれぞれ主題的に

扱っている。

(7) 拙稿「デュルケム派社会（形態）学と人文地理学」史淵　一一七、一九八〇、一八九―二一〇頁。

(8) C. BATAILLON: Table ronde imaginaire sur la géographie universitaire française 1930–1940. *Hérodote*, **28**. pp. 116–153, p. 132.

(9) 彼の高等師範学校の友人に後の地理学者　J. シォンがいた。

(10) H–D. MANN: *Lucien FEBVRE; La pensee vivante d'un historien.* A. Colin, 1972, 189 p., p.17, p.73.

(11) H–D. MANN. 前掲書および R. CHARTIER et J. REVEL; Lucien Febvre et les sciences sociales, *Historiens et geographes*, 1979, p. 425–442. とくに第一点に関して、マンの著書に負っている。

(12) L. FEBVRE; Une étude de géographie humaine: La Basse–Bretagne de M.C. VALLAUX, *RSH.* **16**, 1908, p. 45–49.; Une étude géographique sur le paysan normand (C. R. de la thèse de J. SION) , *RSH.* **19**, 1909, p. 43–51.; Régions naturelles et noms de pays (C. R. du livre de L. GALLOIS), *RSH.* **18**, 1909, p. 269–280.; Le problème de la géographie humaine (C. R. VIDAL DE LA BLACHE: Principes de géographie humaine et BRUNHES & VALLAUX: La géographie de l'histoire. .), *RSH*, **35**, 1923, p. 97–116.; Quelques ouvrages récents de géographie (C. R. A. DEMANGEON: L'impire britanique et Ph. ARBOS: La vie pastorale dans les Alpes françaises), *RSH*, **37**, 1924, p. 117–131.; L'école géographique française et son effort de synthèse, *RSH*, **45**, 1928, p. 27–41.

(13) L. FEBVRE: *La terre et l'evolution humaine*: *Introduction geographique à l'histoire*, Albin Michel, 1922, 427p. 飯塚浩二・田辺裕訳『大地と人類の進化』上・下　岩波文庫

(14) 拙稿　前掲論文

(15) P・クラヴァル（竹内啓一訳）『現代地理学の論理』（大明堂）、一九四頁。

(16) 飯塚浩二　フェーブル『大地と人類の進化』解題　八頁。

(17) L. FEBVRE: *Le Rhin*: *Problemes d'histoire et d'economie*, avec collaboration de A. DEMANGEON, A Colin, 1935.

(18) L. FEBVRE: Deux amis des Annales: Jules SION, Albert DEMANGEON, *AHS*, **3**, 1941, p. 81–89,; H. BAULIG: , Lucien FEBVRE et la géographie, *AG*, **66**, 1951, p. 281–283.

(19) M. BLOCH: Une source peu connue d'histoire et de géographie rurale; Les observations sur le projet de Code

rural du Premier Empire, *AG*, **35**, 1926, p. 458–460.

(20) M. BLOCH: C. R. L. FEBVRE: La terre et l'évolution humaine, *RH*, **145**, 1924, p. 235–240.; C. R. Géographie Universelle publiée sous la direction de P. VIDAL DE LA BLACHE et L. GALLOIS, t. VII et t. IX, *Bull, Fac. Let. Strasb.* **VII**, 1928–29, p. 287–289.; Economie française: monographie géographique (C. R. la thèse de G. CHABOT), *AHES*, **1**, 1929, p. 134–137.; Etude de régions 1) Une monographie géographique (C. R. la thèse de FAUCHER: Le Rhône moyen), *AHES*, **1**, 1929, p. 606–612.; Une haute terre: l'Oisan d'autrefois et d'aujourd'hui (C. R. les thèses de A. ALLIX), *RSH*, **50**, 1930, p. 71–78.; Quelques régions rurales dans le présent et le passé (Quelques comptes rendus concernant les *Annales de Geographie*, numéro du 15 mai 1931), *AHES*, **4**, 1932, p. 426–427.; Régions naturelles et groupes sociaux (C. R. Congrès international de géographie à Paris 1931, les thèses de A. MEYNIER (Massif central) et de H. CAVAILLÈS (Pyrenées)), *AHES*, **4**, 1932, p. 489–510.; Un carrefour; la porte de Bourgogne (C. R. la thèse de A. ALLIX), *RSH*, **53**, 1933, p. 83–86.; Une étude régionale: géographie ou histoire? (C. R. la thèse de P. DEFFONTAINES (Moyenne Garonne)), *AHES*, **6**, 1934, p. 81–85.; Champs et villages (C. R. les thèses de T. LEFEBVRE (Pyrenées) et de R. DION (Le Val de Loire)), *AHES*, **6**, 1934, p. 467–489.; Les paysages agraires; essai de mise au point (C. R. R. DION: Essai...la thèse de O. TULIPPE (Seine et Oise) et un article de D. FAUCHER), *AHES*, **8**, 1936, p. 256–277.; Les régimes agraires; quelques recherches convergents (C. R. Orwin (Openfield), un article de R. DION)), *AHS*, **3**, 1941, p. 118–124.; Problèmes de structure agraire et de méthode (C. R. les articles de P. FÉNELON), *MHS*, II, 1942, p. 61–63.; Points de vue sur le Limousin (C. R. la thèse de A. PERPILLOU), *MHS*, II, 1942, p.77–81.; Un "cas" d'histoire agraire: la Sardaigne (C. R. la thèse de M. LANNOU), *MHS*, III, 1943, p.106–107.

(21) H. BAULIG: Marc BLOCH, géographe, *AHS*, *Hommages* à *Marc Bloch* I, 1945, p. 5–12.

(22) P・ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ（飯塚浩二訳『人文地理学原理』上、四四頁。

(23) 拙稿「フランス学派と日本地理学—戦前期（一九二六—一九四〇）におけるわが国地理学への影響—」『地理の思想』（地人書房）一九八二、二二三—二三三頁。

(24) 谷岡武雄『フランスの農村』（古今書院）、一九六六、四二二＋一四頁。

(25) A. DEMANGEON: L'habitation rurale en France: Essai de classification des principaux types. *AG*, **26**, 1920, p. 352–375.; L'influence des régimes agraires sur les modes d'habitat dans l'Europe occidentale, C. R. du Congrès international de géographie au Caire 4. 1925, p. 92–97.; La géographie de l'habitat rural, *AG*, **36**, 1927, p. 1–23.

(26) Union géographique international (Commission chargée de la question de l'habitat rural): *Rapport de la Commission de l'habitat rural*, Cambridge, 1928. : *Deuxième rapport de la Commission de l'habitat rural*, Florence, 1930.

(27) M. BLOCH : *Les caracteres originaux de l'histoire rurale française.* 1931 河野健一他訳『フランス農村史の基本性格』(創文社)。

(28) 同 五九頁。

(29) 同 九〇—九一頁。(翻訳では「農業文明」)

(30) A. DEMANGEON : L'histoire rurale de la France (C. R. M. BLOCH: Les caractères originaux...), *AG*, **41**, 1932, p. 233–241.; J. SION : Une histore agraire de la France (C. R. M. BLOCH: Les Caractères...), *RSH*, **52**, 1932, p. 25–37.

(31) 水津一朗『ヨーロッパ村落研究』(地人書房)、一九七八、三九一頁。

(32) J. SION : op. cit. p. 34.

(33) E. JUILLARD: Structures agraires et paysages ruraux, 1957, p.7.

(34) G. ROUPNEL : *Histoire de la campagne française*, Bernard Grasset, 1932, 2e édition Librairie Plon, 1974, 374p.

(35) A. DEMANGEON : Une histoire de la campagne française, (C. R. G. ROUPNEL: *Histoire de la campagne française)*, *AG*, **42**, 1933, p. 410–415.

(36) R. DION: Le Val de Loire, étude de géographie régioanle, 1934, 739p. 2e éd. 1980.

(37) L. FEBVRE: Une thèse de géographie: La Val de Loire, *RS*, Ⅶ, 1934, p.133–138.; M. BLOCH: Champs et villages, *op. cit.*

(38) M. BLOCH: 前掲書、七八頁。

(39) R. DION: op. cit. p. 470.

(40) Ibid. p. 516.

(41) R. DION: *Essai sur la formation du paysage rural français,* 1934, 162 p. 2e éd. 1981.

(42) Ibid. p. 31

(43) A. DEMANGEON: Paysages ruraux (C. R. R. DION: *Essai...*), *AG,* **44**, 1935, p. 535–550. J. SION: Facteurs géographiques, groupements humains et genres de vie, (C. R. R. DION: *Essai...*), *Annales Sociologiques, Série E., Morphologie Sociale,* 1937, p. 71–79.

(44) J. SION: Ibid. p. 46.

(45) M. BLOCH: Les paysages agraires, *op. cit.*

(46) それらの成果については第二次大戦後、ナンシーで催された『地理学と農地史』に関する国際会議のために編纂された次の著書が大変参考となる。E. JUILLARD, A. MEYNIER, X. DE PLANHOL, G. SAUTTER; *Structures agraires et paysages ruraux. Un quart de siècle de recherches françaises. Annales de l'Est, Mémoire* 17, 1957, 188p.

(47) J. SION: Sur la structure agraire de la France méditerranéenne, *BSLG,* **8**, 1937, p. 109–131.

(48) J. SION: Sur la civilisation agraire méditerranéenne, *BSLG,* 11, 1940, p. 16–40.

(49) D. FAUCHER: Campagne française et campagnes méridionales, à propos d'un livre récent, *Annales du Midi,* 1933, p. 400–410; Polyculture ancienne et assolement biennal dans la France méridionale, *RGPSO,* **5**, 1934, p. 241–255

(50) J. BLACHE: De la structure parcellaire à l'habitat rural en Lorraine, *BAGF,* 1937, p. 58–64.; Pv. FÉNELON: La structure des champs dans une commune du Périgord, *Revue de la Sociéte commerciale de Bordeaux,* 2e trim., 1938, p.11–22. C. R. in AG., 1938, p. 530–31.

(51) M. BLOCH: Champs et villages. *op. cit.* p. 484.

(52) M. BLOCH: *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*; Supplément établi d'après les travaux de l'auteur (1931–1944) par R. DAUVERGNE, A. Colin, 1961, 230p.

(53) R. DION: Sur la structure agraire de la France méditerranéenne, avec J. SION, *BSLG,* **G**, 1938, p. 1–11.

(54) R. DION: Les principaux types de paysage rural, dans R. BLAIS: *La Campagne,* P.U.F. 1939, p. 37–69.

(55) R. DION: La part de la géographie et celle de l'histoire dans l'explication de l'habitat rural du bassin parisien, *Bull. de la Sociéte de Géographie de Lille,* **67**, 1946, p. 6–80.

(56) A. DEMANGEON: L'histoire rurale de la France, *op. cit.* p. 410.

(57) R. DION: A propos des paysages ruraux, *AG,* **45**, 1936, p. 84–88.

(58) 一宮宏之 前掲論文

(59) A. DEMANGEON: Une définition de la géographie humaine, p. 25–34, dans "*Problèmes de geographie humaine*", A Colin, 1942, 407p.; R. DION: La géographie humaine rétrospective, leçon d'ouverture du cour de géographie historique de la France prononcée au Collège de France, le 4 décembre 1948, *Cahiers internationaux de Sociologie,* **6**, 1949, p. 3–27.

(60) A. DEMANGEON: L'histoire rurale de la France, *op. cit.* p. 234.

(61) A. BURGUIÈRE: op. cit. p.1355

(62) 服部春彦 前掲論文 一三六一頁。

(63) F. BRAUDEL: La géographie face aux sciences humaines, *AESC,* VI, 1951, p. 485–492.

(64) Ibid. p. 491

(65) Ibid. p. 491.

(66) F. BRAUDEL: Ya-t-il une géographie de l'individu biologique? *MHS,* VI, 1944. p. 26–32.

(67) E. JUILLARD: Aux frontières de l'histoire et de la géographie. *Revue historique,* **CCXV**, 1956. p. 267–273.

(68) R. MANDROU: Géographie humaine et Histoire sociale, *AESC,* XII, 1957, p. 619–627.

(69) E. Le Roy LADURIE: Histoire et Climat, *AESC,* XIV, 1959, p. 3–34.; *Histoire du climat depuis l'an mil,* Flammarion, 1967, 379p.

(70) J. BERTIN, J.J. HÉMARDINQUER, M. KEUL, W. G.L. RANDLES: *Atlas des cultures vivrières,* Mouton, EPHE, VIe Section.

(71) P. CHAUNU: *Histoire, science sociale, op. cit.* p.188–195.

略号

AHES＝*Annales d'histoire économique et sociale*
AHS＝*Annales d'histoire sociale*
MHS＝*Mélanges d'histoire sociale*
AESC＝*Annales*; *Économie, Sociéte, Civilisation*
} *Annales*

AG＝*Annales de Géographie*

BSLG＝*Bulletin de la Sociéte languedocienne de Géographie*

RGPSO＝*Revue géographique des Pyrenées et du Sud-Ouest*

RH＝*Revue historique*

RSH＝*Revue de Syntèse historique*

（付記）本稿は昭和五七・五八年度科学研究費総合研究（A）（代表者、竹内啓一）『地理思想におけるパラダイムの移行過程の構造』の欧文報告『Languages, Paradigms and Schools in Geography—Japanese Contributions to the History of Geographical Thought (2), edited by Keiichi Takeuchi, Laboratory of Social Geography, Histotsubashi University, Kunitachi, Tokyo, 1984』にL'école géographique française et l'école des *Annales*と題して報告したものをもととしている。右論文の発表後地理学において、地理学とアナール学派の関係を論じた二つの注目すべき論考を得た。

A.R.H. BAKER: Reflections on the Relations of Historical geography and the *Annales* School of History, A.R.H. BAKER and D. GREGORY (eds): *Explorations in Historical Geography* : *Interpretative Essays.* Cambridge University Press, 1984. p. 1–27.

P. CLAVAL: The Historical Dimension of French Geography, *Journal of Historical Geography,* 10, p. 229–245.

前者は拙稿中に引用したIGC東京大会の発表を完成稿としたものである。そこでベーカーはフランスにおけるアナール学派と歴史地理学の相互の関係を検討し、この遡行的な方法が新しい地理学の道を見出す前望的な探索となるかを課題としている。そしてこれからの社会的歴史地理学は何らかの社会理論に依拠する必要があるとし、アナール学派とマルクス主義との相互近接性を指摘しつつ、ベーカーはマルクス主義、とくにサルトルの実存主義的マルクス主義の概念の適用可能

性を一九世紀フランス農村社会の分析を試み、新しい社会的歴史地理学の方向を探っている。

後者クラバルの論文は今世紀初頭のヴィダル・ド・ラ・ブラーシュおよびその弟子たちの地理学には歴史的研究が重要な位置をしめていたことを指摘し、二〇年代までは地理学の研究が歴史学の新しい展開に大きな影響力をもったこと、とりわけ、地理学研究の対象である地域が単なる研究のフレームワークではなく、一つの社会的実在であり、そのことから総合的、グローバルなアプローチが必要とされたことが、『アナール』の方法に大きく寄与したとみる。そして具体的には拙稿でも取上げたように農村研究において地理学と歴史学の共有部分があった。

戦後の一時期フランス地理学には歴史的研究の衰退した時期があったが、昨今新しい地理学の傾向として歴史的側面に関心がもたれており、また、アナール学派の特徴とされる、メンタリティの研究にも若干の成果がみられるという。

いづれもかつての地理学とアナール学派との密接な関係を振り返りつつ、その後孤立化した地理学を救い新しい歴史地理学の方法を分日のアナール学派の研究を参考にしながら探ろうとするもので、拙稿に欠けている前望的視点からまとめられた示唆的な論攻である。